

## [D年] 公現後第4主日(2024年1月28日)

## 【旧約聖書日課】ヨブ記 22章11～28節

- 11 また、暗黒に包まれて何も見えず  
洪水があなたを覆っているので  
12 あなたは言う。  
「神がいますのは高い天の上で  
見よ、あのように高い星の群れの頭なのだ。」  
13 だからあなたは言う。  
「神が何を知っておられるものか。  
濃霧の向こうから裁くことができようか。」  
14 雲に遮られて見ることもできず  
天の丸天井を行き来されるだけだ」と。  
15 あなたは昔からの道に  
悪を行う者の歩んだ道に気をつけよ。  
16 彼らは時ならずして、取り去られ  
流れがその基までぬぎ去った。  
17 神に向かって彼らは言っていた。  
「ほうっておいてくれ  
全能者と呼ばれる者に何ができる。」  
18 それに対してあなたは言った。  
「神はその彼らの家を富で満たされる。  
神に逆らう者の考えはわたしから遠い。」  
19 神に従う人なら見抜いて喜び  
罪のない人なら嘲笑って言うであろう。  
20 「彼らの財産は確かに無に帰し  
残ったものも火になめ尽くされる。」  
21 神に従い、神と和解しなさい。  
そうすれば、あなたは幸せになるだろう。  
22 神が口ずから授ける教えを受け  
その言葉を心に納めなさい。  
23 もし、全能者のもとに立ち帰り  
あなたの天幕から不正を遠ざけるなら  
あなたは元どおりにしていただける。  
24 黄金を塵の中に  
オフィルの金を川床に置くがよい。  
25 全能者こそがあなたの黄金  
あなたにとっての最高の銀となり  
26 あなたは全能者によって喜びを得  
神に向かって顔を上げ  
27 あなたが祈れば聞き入れられ  
満願の献げ物をすることもできるだろう。  
28 あなたが決意することは成就し  
歩む道には光が輝くことだろう。

## 【使徒書日課】ヨハネの手紙二

1長老のわたしから、選ばれた婦人とその子たちへ。  
わたしは、あなたがたを真に愛しています。わたしばかりでなく、真理を知っている人はすべて、あなたがたを愛しています。2それは、いつもわたしたちの内にある真理によることで、真理は永遠にわたしたちと共にあります。3父である神と、その父の御子イエス・キリストからの恵みと憐れみと平和は、真理と愛のうちにわたしたちと共にあります。  
4あなたの子供たちの中に、わたしたちが御父から受けた掟どおりに、真理に歩んでいる人がいるのを知って、大変うれしく思いました。5さて、婦人よ、あなたにお願いしたいことがあります。わたしが書くのは新しい掟ではなく、初めからわたしたちが持っていた掟、つまり互いに愛し合うということです。6愛とは、御父の掟に従って歩むことであり、この掟とは、あなたがたが初め

から聞いていたように、愛に歩むことです。7このように書くのは、人を惑わす者が大勢世に出て来たからです。彼らは、イエス・キリストが肉となって来られたことを、公に言い表そうとしません。こういう者は人を惑わす者、反キリストです。8気をつけて、わたしたちが努力して得たものを失うことなく、豊かな報いを受けるようにしなさい。9だれであろうと、キリストの教えを越えて、これにとどまらない者は、神に結ばれていません。その教えにとどまっている人にこそ、御父も御子もおられます。10この教えを携えずにあなたがたのところに来る者は、家に入れてはなりません。挨拶してもなりません。11そのような者に挨拶する人は、その悪い行いに加わるのです。

12あなたがたに書くことはまだいろいろありますが、紙とインクで書こうとは思いません。わたしたちの喜びが満ちあふれるように、あなたがたのところに行って親しく話し合いたいものです。13あなたの姉妹、選ばれた婦人の子供たちが、あなたによろしくと書いています。

## 【福音書日課】ヨハネによる福音書 8章21～36節

21そこで、イエスはまた言われた。「わたしは去って行く。あなたたちはわたしを捜すだろう。だが、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。わたしの行く所に、あなたたちは来る事ができない。」22ユダヤ人たちが、「『わたしの行く所に、あなたたちは来る事ができない』と言っているが、自殺でもするつもりなのだろうか」と話していると、23イエスは彼らに言われた。「あなたたちは下のものに属しているが、わたしは上のものに属している。あなたたちはこの世に属しているが、わたしはこの世に属していない。24だから、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる、わたしは言ったのである。『わたしはある』ということ信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」25彼らが、「あなたは、いったい、どなたですか」と言うので、イエスは言われた。「それは初めから話しているではないか。26あなたたちについては、言うべきこと、裁くべきことがたくさんある。しかし、わたしをお遣わしになった方は真実であり、わたしはその方から聞いたことを、世に向かって話している。」27彼らは、イエスが御父について話しておられることを悟らなかつた。28そこで、イエスは言われた。「あなたたちは、人の子を上げたときに初めて、『わたしはある』ということ、また、わたしが、自分勝手には何もせず、ただ、父に教えられたとおりに話していることが分かるだろう。29わたしをお遣わしになった方は、わたしと共にいてくださる。わたしをひとりにしてはおかれぬ。わたしは、いつもこの方の御心に適うことを行うからである。」30これらのことを語られたとき、多くの人々がイエスを信じた。  
31イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。32あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。33すると、彼らは言った。「わたしたちはアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことはありません。『あなたたちは自由になる』とどうして言われるのですか。」34イエスはお答えになった。「はっきり言っておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。35奴隷は家にいつまでもいるわけにはいかないが、子はいつまでもいる。36だから、もし子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ヨブ記 22章11～28節

- <sup>11</sup>あるいは、暗闇であなたは見ることができず  
洪水があなたを覆う。
- <sup>12</sup>神は天の高みにおられるのではないか。  
見よ、星々の頂がいかに高いかを。
- <sup>13</sup>しかし、あなたは言う。  
「神は何を知っているのか。  
密雲の向こうから裁くことができようか。
- <sup>14</sup>雲が覆いとなって、神は見ることができず  
天の周りを歩き回るだけではないか」と。
- <sup>15</sup>あなたは昔からの道を守ろうとするのか  
不義の者たちが歩んだ道を。
- <sup>16</sup>彼らは時が来る前に取り去られ  
流れがその土台を押し流す。
- <sup>17</sup>神に向かって、彼らは言った。  
「私たちから離れてくれ。  
全能者が私たちに何ができようか」と。
- <sup>18</sup>神は彼らの家を良いもので満たしていた。  
しかし悪しき者の謀は私から遠い。
- <sup>19</sup>正しき人はこれを見て喜び  
罪なき人は彼らを嘲り笑う。
- <sup>20</sup>「確かに、私たちの敵は滅ぼされ  
彼らが残したのも火が焼き尽くす」と。
- <sup>21</sup>あなたは神と和解し、平和を得てほしい。  
そうすれば、幸いが訪れる。
- <sup>22</sup>神が口から教えを受け  
その言葉を心に留めてほしい。
- <sup>23</sup>あなたが全能者に立ち帰るなら  
あなたは元どおりになる。  
あなたの天幕から不正を遠ざけるがよい。
- <sup>24</sup>黄金を塵の上に  
オフィルの金を川床の岩に置き。
- <sup>25</sup>全能者があなたの黄金となり  
あなたにとって高価な銀となる。
- <sup>26</sup>その時、あなたは全能者を喜びとし  
神に向かって顔を上げることができる。
- <sup>27</sup>あなたが神に懇願すれば、聞き入れられ  
誓いを果たすことができる。
- <sup>28</sup>あなたが事を決めれば、それは成就し  
あなたの道を光が照らす。

ヨハネの手紙二

<sup>1</sup>長老の私から、選ばれた婦人とその子どもたちへ。  
私は、あなたがたを真理の内に愛しています。私だけで  
なく、真理を知る人は皆、あなたがたを愛しています。  
<sup>2</sup>それは、私たちの内にとどまる真理によることで、真  
理は永遠に私たちと共にあります。<sup>3</sup>父なる神と、父の  
御子イエス・キリストから、恵みと憐れみと平和が、真  
理と愛の内に、私たちと共にあります。  
<sup>4</sup>「あなたの子どもたちの中に、私たちが御父から受け  
た戒めのとおり、真理の内に歩んでいる人がいるの  
を見て、私はとても喜んでいました。<sup>5</sup>さて、婦人よ、あなた  
にお願いしたいことがあります。私が書くのは新しい戒  
めではなく、私たちが初めから持っていた戒め、つまり、  
互いに愛し合うということです。<sup>6</sup>愛とは、御父の戒め

に従って歩むことであり、この戒めとは、あなたがたが  
初めから聞いているように、真理の内に歩むことです。

<sup>7</sup>なぜなら、人を惑わす者が大勢世に出て行ったから  
です。彼らは、イエス・キリストが肉体をとって来られ  
たことを告白しません。こういう者は人を惑わす者で  
あり、反キリストです。<sup>8</sup>よく気をつけて、私たちが働いて  
得たものを失うことなく、豊かな報いを受けるようにし  
なさい。<sup>9</sup>先走って、キリストの教えにとどまらない者  
は皆、神を持っていません。その教えにとどまっている  
人は、御父と御子とを持っています。<sup>10</sup>この教えを携え  
ずにあなたがたのところに来る者は、家に入れてはなり  
ません。挨拶してもなりません。<sup>11</sup>そのような者に挨拶  
する人は、その悪い行いを共にすることになります。

<sup>12</sup>あなたがたに書くことはたくさんありますが、紙と  
インクで書こうとは思いません。私たちの喜びが満ち溢  
れるように、あなたがたのところに行き、親しく話した  
と思います。<sup>13</sup>選ばれたあなたの姉妹の子どもたちが  
あなたによろしくと書いています。

ヨハネによる福音書 8章21～36節

<sup>21</sup>イエスはまた言われた。「私は去って行く。あなた  
がたは私を捜すだろう。だが、あなたがたは自分の罪の  
うちに死ぬことになる。私の行く所に、あなたがたは来  
ることができない。」<sup>22</sup>ユダヤ人たちが、「『私の行く  
所に、あなたがたは来ることができない』と言っている  
が、まさか自殺でもするつもりなのだろうか」と話して  
いると、<sup>23</sup>イエスは言われた。「あなたがたは下から出  
た者だが、私は上から来た者である。あなたがたはこの  
世の者であるが、私はこの世の者ではない。<sup>24</sup>だから、  
あなたがたは自分の罪のうちに死ぬことになる。私は  
言ったのである。『私はある』ということ信じないなら  
ば、あなたがたは自分の罪のうちに死ぬことになる。』  
<sup>25</sup>彼らが、「あなたは一体、何者なのか」と言うと、イ  
エスは言われた。「それは初めから話しているではない  
か。<sup>26</sup>あなたがたについては、言うべきこと、裁くべき  
ことがたくさんある。しかし、私をお遣わしになった方  
は真実であり、私はその方から聞いたことを、世に向か  
って話している。」<sup>27</sup>彼らは、イエスが御父について話  
しておられることを悟らなかった。<sup>28</sup>そこで、イエスは  
言われた。「あなたがたは、人の子を上げたときに初め  
て、『私はある』ということ、また私が、自分勝手には  
何もせず、父に教えられたとおりに、話していることが  
分かるだろう。<sup>29</sup>私をお遣わしになった方は、私と共に  
いてくださる。私を独りにしてはおかれぬ。私は、い  
つもこの方の御心に適うことを行うからである。」<sup>30</sup>こ  
れらのことを語られたとき、多くの人々がイエスを信じ  
た。

<sup>31</sup>イエスは、ご自分を信じたユダヤ人たちに言われた。  
「私の言葉にとどまるならば、あなたがたは本当に私の  
弟子である。<sup>32</sup>あなたがたは真理を知り、真理はあなた  
がたを自由にする。」<sup>33</sup>彼らは言った。「私たちはア  
ブラハムの子孫です。今まで誰かの奴隷になったことはあ  
りません。『あなたがたは自由になる』とどうして言わ  
れるのですか。」<sup>34</sup>イエスはお答えになった。「よくよ  
く言うておく。罪を犯す者は誰でも罪の奴隷である。<sup>35</sup>  
奴隷は家にいつまでもいるわけにはいかないが、子はい  
つまでもいる。<sup>36</sup>だから、もし子があなたがたを自由  
にすれば、あなたがたは本当に自由になる。」

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

- ・1月28日「公現後第4主日」の日課主題は「教えるキリスト」。
- ・旧約聖書日課は、「ヨブ記」から、ヨブと友人テマン人エリファズとの三巡目の対話箇所の一部。使徒書日課は、「ヨハネの手紙二」の全文。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「仮庵祭」を場面とする主イエスとユダヤ人らとの議論の一部。

**旧約日課(ヨブ 22章より)**

- ・「ヨブ記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「諸書」の中でも「詩編」および「箴言」と共に「エメット」と称され特有の詩文学様式を有する文書。導入(1~2章)と末尾(42章後半)には散文体による「ヨブの説話物語」が置かれ、それらに挟まれた本体は韻文体の対話形式で構成されている。現在の構成形態に編纂され正典的な扱いが始まったのは、ペルシア帝国支配時代中葉(前5世紀)以降からヘレニズム時代の初期(前3世紀)までのいずれかの時期であると考えられているが、原資料となる「ヨブ物語」自体は古い時代から伝承説話として存在していたと考える者も多い。
- ・「ヨブ記」は、「ヨブ」という遊牧生活をする族長を主人公として組み立てられている。「ヨブ」という人物の実在性については、論拠づけるいかなる資料も存在しないが、「エゼキエル書」は、「ノア」および「ダニエル」と共に「ヨブ」の名を「正しい人」の代表として挙げて(エゼキエル 14:14,20)。聖書正典の物語ユダ・イスラエル史において、遊牧生活者がどのような社会的立ち位置で存在したのか、明確なことは分からない。王国時代初期のダビデ王は、「羊飼」を生業とする家に生まれたとされており、また、前8世紀に北王国(イスラエル)の世俗(サマリア)と宗教(ベテル)の権力者に向かって「預言活動」をしたとされる預言者アモスは、南王国(ユダ)領域に含まれるテコアの「牧者(ノーケード)」と呼ばれているが、これは「牧畜管理者」あるいは「牧羊者集団の首長」を指すと考えられる。このように、ユダ・イスラエル社会には、一定の牧畜者集団が存在し続けた。「ヨブ」の実在性が確かめられないとしても、「義人ヨブの伝承」は実感を伴ったイメージで受け継がれたと考えることはできる。
- ・「ヨブ記」の主題は、一般に「義人の苦難の意味」を問うことにあるとされる。1~2章の導入部に置かれた説話物語は、「義人の苦難」を現実にはあり得ないほど大袈裟な災難の連続として表現し、また末尾(42章)でそれらの災難で失ったものの回復が描かれているが、これは主題を明示するための演出であろう。
- ・「義人の苦難の意味」を問う主題を巡る論考は、まずヨブと三人の友人(テマン人エリファズ、シュア人ビルダド、ナアマ人ツォファル)との対話として展開され、その後、もう一人の友人エリフの勧告を経て、神からヨブへの答えの提示によって完結されている。

・日課箇所は、三人の友人の一人エリファズとの三巡目の対話として描かれている箇所の一部である。ヨブと三人の友人たちとの対話で繰り返し問われているのは、人が苦難を被るのはその人が何らかの罪を犯したからだという現世的因果応報論の妥当性である。旧約正典のほとんどは、終末における復活信仰に基づく「最終的な審判」を前提にしておらず、人の人生を誕生から死までという現世的な枠組みの中で評価する死生観に立っている。そこで、苦難を被ったときには、自分の過去の言動における罪や過ちを問うように仕向けられるが、思い当たる節がなければ葛藤を生じることになる。エリファズの語る正論は、葛藤を抱えるヨブの心情を変化させるには至らないのである。

**使徒書日課(Ⅱヨハネ)**

- ・「ヨハネの手紙二」は、「ヨハネ文書」として括られる文書集に含まれる書簡文書。「ヨハネ福音書」や「ヨハネの手紙一」および「手紙三」と共に、使徒ヨハネを指導者とする「教会共同体」の中で生み出されてきた文書であると考えられてきた。「手紙一」が書簡の様式を一切欠いているのに対して、「手紙二」は「手紙三」と共に、簡略ではあるが書簡様式を保存している。
- ・本書簡文書の著者として名乗る「長老のわたし」は、教会伝承で「使徒ヨハネ」とは別の「長老ヨハネ」と認識されてきた。一方、宛名として記されている「選ばれた婦人とその子たち」は、直訳すれば「選ばれた人、女主人(キュリア)、そしてその子ら」で、特定の人物を示唆する表現ではなく、教会と信者全般を指していると解される。「キュリア」は、男性形「キュリオス」であれば「主」あるいは「主人」と訳される語で、「新約」では、神やイエスを指して「主」と用いられる例が多いが、一般的な敬意を払った呼称としてもしばしば用いられている。「キュリア」は、会話で用いられるような呼称として解すれば、「ご婦人」あるいは「奥さま」といったニュアンスで、「ご主人」あるいは「旦那さま」とも訳しうる「キュリオス」と対になる。書簡であっても、使用人や下僕が自分の女主人に宛てているのならばありうる表現かもしれないが、この書簡では、「長老」を名乗る者が自分と対等または目下と思われる者に宛てているので、一般的な用法は当てはまらない。そこで、「主(キュリオス)」の妻としての「教会」を指して、この語「キュリア」が用いられていると解釈するのが通例である。「教会」を「キリストの花嫁」と位置づける考えは、「パウロ書簡集」にも見られる(エフェソ 5:23~32)。なお、5節「婦人」は同じく「キュリア」の訳であるが、13節「選ばれた婦人」は「選ばれた者(エクレクトス)」の女性形に過ぎない。
- ・本書簡は、「ヨハネ文書」で特徴的に用いられる「真理(アレテイア)」、「掟(エントレー)」などの用語が多用されている。また、9~10節で繰り返される「教え(ディダケー)」も、用例は少ないが、「ヨハネ福音書」での用法を踏まえている(ヨハネ 7:16,17, 18:19)。

## 福音書日課(ヨハネ 8章より)

・日課箇所は、「仮庵祭」のエルサレムで主イエスがユダヤ人らと交わしたとされる議論の一部。一連の議論は、8:12 から始まり、章末(8:59)で石を投げつけられそうになった主イエスが身を隠すまで続く。この議論の冒頭は、「イエスは再び言われた」とあり、本来は7:44 に続く構成であったのではないかと考えられる。ここから展開する議論の発端は、主イエスの「わたしは世の光である」から始まる発言であり、これに対してファリサイ派の人々が噛みついた(8:12)。しかし、すでに前段までの発言で群衆の間に対立が生じ、主イエスを捕えようと画策し始めている者たちがいたと、描かれている。8:12 の主イエスの発言だけが、ファリサイ派の批判を招いたわけではない。いずれにしても、一連の議論は、ファリサイ派をはじめとする一部のユダヤ人と対立した緊張状態の中で展開している一方で、そこに居合わせたユダヤ人の中に、なお主イエスへの信認を示した者たちがいたことも描かれており(8:30 など)、混沌とした状況が強調されている。

・日課箇所の前半は、主イエスが行こうとされているところを巡って議論がされている。その中で、「わたしはある(エゴー・エイミ)」という表現が取り上げられている(24 節、28 節)。この表現は、しばしば、「出エジプト記」3 章の「モーセの召命譚」で神の名として示される「わたしはある(エヒエ)」(出 3:14)というヘブライ語表現に対応するものとして解されてきた。他方で、「エゴー・エイミ」は、補語〇〇を伴った「わたしは〇〇である」という用法で多用されており、「ヨハネ福音書」では特に主イエスの自己規定発言として定型的に用いられている。日課箇所の議論の発端となった発言にも「わたしは世の光である」と、この表現が含まれる。また、単に「エゴー・エイミ」という表現で「わたしだ」と自己顕示する発言としても多用されている。これらの用例を踏まえると、「エゴー・エイミ」は、単純にモーセに示された神の自己呼称の主イエスへの適用ということではなく、主イエスが現実に存在して自己提示しうる者であるということを示すための表現として問いかけられていると考えることができるかもしれない。主イエスの地上における「現在性(リアル・プレゼンス)」の問題は、初期教会においては「キリスト仮現説(ドケティズム)」への反論として、後の時代には「聖体」論争において、焦点とされてきた。

・日課箇所後半は、「真理」に関する主イエスの発言を発端にして、「アブラハムの子孫」の問題が論題として展開している。「だれがアブラハムの子か」という論争は、「共観福音書」でも取り上げられており、当時のユダヤ社会においてよく知られた論題だったのであろう。主イエスの主張は、「アブラハム」を民族的なルーツとしてのみならず、神学的・信仰的なルーツを示す象徴的存在として位置づけることにあった。このような信仰共同体的ルーツとしての「アブラハム」の普遍化は、使徒パウロによってもなされている(ロマ 4 章など)。

## 来週の誕生日 (1月28日～2月3日)

。

## 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-157 番「いざ語れ、主の民よ」は、ジュネーブ詩編歌 124 に倣って、日本語訳聖書の詩編 124 編に基づいて改作された詩編歌。曲は、改革派歌集で詩編 124 編の曲として古くから用いられてきたもの。
- ・21-57 番「ガリラヤの風おふる丘で」(=Ⅲ5)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともにおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・藤田尚昊が曲を付した。
- ・21-472 番「朝ごとに主は」は、20 世紀前半のドイツの宗教詩人ヨッヘン・クレッパの宗教詩集『キリエ』(1938 年)所収の「朝の歌」にツェベライが曲を付けた讃美歌。クレッパの詩はイザヤ 50:4 に着想を得ている。

## 21-157「いざ語れ、主の民よ」

## English version

OLD 124<sup>th</sup> (Now Israel may say)

- 1 Now Israel may say, and that in truth:  
If that the Lord had not our right maintained,  
If that the Lord had not with us remained  
When cruel foes against us rose to strive,  
We surely had been swallowed up alive.
- 2 Yea, when their wrath against us fiercely rose,  
The swelling tide had o'er us spread its wave,  
The raging stream had then become our grave,  
The surging flood, in proudly swelling roll,  
Most surely then had overwhelmed our soul.
- 3 Blest be the Lord, who made us not their prey;  
As from the snare a bird escapeth free,  
Their net is rent and so escaped are we;  
Our only help is in God's holy name,  
Who made the earth and all the heavenly frame.

## 21-472「朝ごとに主は」

## Er weckt mich alle Morgen

1. Er weckt mich alle Morgen, / Er weckt mir selbst das Ohr. / Gott hält sich nicht verborgen, / führt mir den Tag empor, / daß ich mit Seinem Worte / begrüß das neue Licht. / Schon an der Dämmerung Pforte / ist Er mir nah und spricht.
2. Er spricht wie an dem Tage, / da Er die Welt erschuf. / Da schweigen Angst und Klage; / nichts gilt mehr als Sein Ruf. / Das Wort der ewgen Treue, / die Gott uns Menschen schwört, / erfahre ich aufs neue / so, wie ein Jünger hört.
3. Er will, daß ich mich füge. / Ich gehe nicht zurück. / Hab nur in Ihm Genüge, / in Seinem Wort mein Glück. / Ich werde nicht zuschanden, / wenn ich nur Ihn vernehm. / Gott löst mich aus den Banden. / Gott macht mich Ihm genehm.
4. Er ist mir täglich nahe / und spricht mich selbst gerecht. / Was ich von Ihm empfahe, / gibt sonst kein Herr dem Knecht. / Wie wohl hat's hier der Sklave, / der Herr hält sich bereit, / daß Er ihn aus dem Schlafe / zu seinem Dienst geleit.
5. Er will mich früh umhüllen / mit Seinem Wort und Licht, verheißsen und erfüllen, / damit mir nichts gebricht; / will vollen Lohn mir zahlen, / fragt nicht, ob ich versag. / Sein Wort will helle strahlen, / wie dunkel auch der Tag.